

私の卒業研究を振り返って

～大学で学ぶということ～

1. 私の卒業論文の題名は？

より良い児童養護施設の在り方とは～食を通して考える～

2. なぜこの題名に？

2回生の実習が私の大きな学びに繋がった

3. 私が卒業論文で伝えたかったことは？

ごく当たり前になっている食という存在の重要性

4. 卒業論文を書く上の苦労は？

思っている以上に時間が経つのは早いということ

5. 卒業論文ができた時の気持ちは？

喜び・解放感、そして寂しさ…

6. 同志社大学での4年間～1回生へのメッセージ～

春学期に引き続き…

たくさん学び・たくさん遊び・たくさん働き

そしてたくさん、気付いてください。

良くも悪くも自由な時間です。

皆さんは3年後の自分が見えますか？

学生という時間がどれほど大切な時間なのか気づいてください。

喜び・悲しみ・つらさ・楽しさ

全てがこれからの未来に繋がっていることを

忘れないでください

村居 芽久巳

すごく、ここで話しくいんですよね、卒論の話って。なぜならゼミの担当の先生がいるからなんですけど。「あなたやってないわよね」というのが、バレてしまいそうで、怖いんですけど。私の卒業論文の題名は「より良い児童養護施設の在り方とは——食を通して考える——」というタイトルにしたんですが、なぜこのタイトルにしたか。3回生の時に児童養護施設に実習に行きました。その時の施設が「食」を大切にしておられて、それが私にとっては、ぴったりあっていて、興味深かったので、どうしても児童養護施設の在り方を考える時、私の中で「食」というものが放せなかったというのがあるんですけど、私は卒論を書く上で、最終的に結論を絶対に大舎性と小舎性というの、わかります？ 大きな団体で行動するのか、小さな家族のような枠組みで行動するのかの違いですが、小さい方が絶対的にいいと考えていた人なので、そっちに結論を持っていこうと思っていて、その理由も、なぜ小さいグループがいいのか。食なんですよね、私の中では。大きい枠組みでご飯を食べようと思うと、一人ひとりのニーズに応えることは難しいことなので、そういう面でも小さいグループで生活していくことが一番なんじゃないかなと考えています。

私がこの卒業論文で伝えたかったことは、皆さんは普通にご飯を食べていて、おなかがすいたら家に食べ物があつたり、自分で買えたりすると思うんです。ごくあたりまえですけど、それをあたりまえと考えている人は少ないんですよね。『世界が、もし100人の村だったら』という本、私らみたいに大学の教育を受けている人は世界を100人にしたら、一人だけなんですよね。にもかかわらず、20人は栄養が十分ではなく、一人は死にそうなんです。ということは、あたりまえと思っている食は、世界単位で考えると、実は、あたりまえじゃないんだなということ、1回生の時、『世界が100人の村だったら』という本を見たり、テレビで見て「自分ら、あたりまえと思っているけど、全然あかん」と思ったんですよね。食べたいものを食べられるのは、ほんとに幸せなことで、施設に入っている子どもたちだったら、嫌いな物が出てきても他に何もなければ食べるしかない。好き嫌い、よくないけど、その子どもたちのニーズには応えられていない。それが自分の中でひっかかりがあつて、実習に行った時、それにできる限り、応えていこうとしている施設だったので、そういうことが、より良い児童養護施設なのではないかなと感じました。

卒業論文を書く上での苦勞。私は書き出すまでに時間がかかりました。パソコンに向き合えませんでした。パソコンは誘惑が一杯あつて、ワードを開いているのにインターネットをつないでしまって、違うものを見たり、遊んでしまう誘惑がすごく多くて、あとは文献が少なくて、児童養護施設のことを書いている本はたくさんあるのに、そこに食がからまっているのはない。逆に子どもと食でみてしまうと、保育士さんが見るような食育の本しか出てこなかったり、文献が少なかったのもっと早くから探せばよかった、みたいなのを後で思っていました。

だんだん書いているうちに「あれ、自分って、何が言いたいんやろ」となってくるんです。結論はここ、と決めているはずなのに、この流れでは違うのが出てきたりして、自分の中では矛盾がたくさん出てきて、誰も助けしてくれない、パソコンで書いている上では。パソコンとは友だちになれないと思いました。ほんとに時間がたつのが早くて11月30日にゼミで提出しなさいと言われた時、私はまだ「はじめに」しか書いてなくて「出せません」と。そこから必死でやりました。実際、短期間に書き上げてしまった人なんですけど。内容が納得いかない部分もあるし、先生がいう通りのタイムスケジュールでやるべきだったなどと後悔しています。

卒業論文ができた時は、うれしいというのもあったんですけど、「あ、やっとパソコンを見なくて済むんだ」みたいな、パソコンを見ることを絶対やらなくていけないこととして、見なくて済むことのラクさ、ゲームしても怒られないみたいな、すごい、うれしかったのと、ただ卒論ができて提出した時、「あ、もう卒業してしまうんだ」と思った時に、すごく寂しくなりました。「あ、出したくなかった、出さずに、もう1年くらい、いたかった」と思いました。

「社会人、いや」と思ったので。寂しいなということの方が、私の中では強かったかなと思いました。

1回生の皆さんへのメッセージですが、春学期も「たくさん学び、たくさん遊び、たくさん働き、そしてたくさん気づいてください」とメッセージを送ったんですが、それは変わらずやってほしいなと思うんですけど、1年間、大学で学ばれて気づかれたと思いますが、大学生って、よくも悪くも自由な時間が多いと思います。高校の時とかは担任の先生に「遅刻してくるなよ」とか「宿題を出せ」と、めっちゃ、言われたと思いますが、大学は、そういうものないし、ただ福祉は人数が少ない分、それに近いものはあると思いますが、でも時間が多いので、どう自分で使っていくのが重要なのかなと、今となっては思えるようになりました。3年後、私たちの年になった時、皆さんも多分、そう感じるんじゃないかなと思って、1回生の時は、そんなこと考えてもなかったし、「あと3年もある」と思っていたけど、実際、3年たつと「なんて短い4年間だったのだろう」と思うし、「これの倍くらいあればもっとたくさん遊べたし、学べたし、働かずに済んだのに」と、今は思っていて「社会人って大変だな」と思っています。学生という時間が多分、いい、すばらしい時間なんですよ。夏休みもあるし、好きな時に働けて、好きな時間に自分で時間さえつくれば遊べて、それが社会人になると、そういうふうになくなるし、犠牲にしていけないといけないものが、たくさん出てくるんだろうと思った時、「ああ学生でいたいな」と思いました。

最後はドラマに出てきそうな言葉を書いてしまいましたが、ほんとに大学生生活4年間、楽しいこともあれば、めっちゃ、嫌なことも、腹立つこともたくさんありますけど、それがあったからこそ、今の自分がいると思うし、今の自分があるからこそ、明日、来年、10年後の自分がいると思うので、その自分に恥ずかしくないように、いろんなことをやっていけたらいいなと思っているので、皆さんもそうしていただけたらいいかなと思います。以上です。

より良い児童養護施設の在り方とは

—食を通して考える—

19062053

村居 芽久巳

<キーワード> 「児童養護施設」「小舎制・大舎制」「食」

<梗概>

近年、児童養護問題が多発している。そのような現状の中で、私自身が経験した児童養護施設での実習を通して学んだことから、より良い児童養護施設の在り方を考えた。考えをまとめる上で人間が生きていく上で欠かすことのできないものであり、とても重要な意味を持っている食というものに観点を置くこととした。食というものは、家庭ごとにそれぞれ異なった文化をもっており、その家庭的な面にどれだけ施設の中で近付けていけるか、その為に施設がどのような方法で支援を行っているかを、インタビューを行うことで知り得ていくことを目指した。児童養護施設の小規模化が望まれてきている昨今、家庭というものに偶然問題を抱えてしまった子どもたちに対して、どれだけ望ましい環境で生活支援を行えるかどうかを考えつつ、食というものを通してこれからの児童養護施設の在り方を小舎制と大舎制という二つの施設の形から考えることを試みた。

<目次>

はじめに

第一章 児童養護施設とは

第一節 児童養護施設の成り立ち

第二節 児童養護施設の現状

第二章 小舎制と大舎制

第一節 小舎制のプラス面と問題点

第二節 大舎制のプラス面と問題点

第三節 それぞれの食への取り組み

第三章 食と子どもたちとの関係性

第一節 子どもの成長と食

第二節 食を通しての子どもたちと施設職員の関わり

第三節 食がもたらす子どもたちへの影響

第四章 児童養護施設の在り方

第一節 施設支援における食の位置づけ

第二節 小舎制の可能性

おわりに

・参考文献